『昭和25年、悪役令嬢は日本を滅ぼしたい。』

―転生先は異世界ではなく、朝鮮戦争直前の日本でした―

『第四話　断罪イベントは会議室で』

―1―

※

五月二十七日、朝になった。

美璃亜としては、

「朝になってもうた……」

である。

窓の外には、昨夜の雨が嘘みたいな朝日。

鳥まで鳴いている。

世界は爽やかだった。

美璃亜だけが死んでいた。

「……眠い」

「お嬢様」

「はい」

「もう少しだけ、お顔をお上げくださいませ」

「このまま食べさせて」

「無理でございます」

「じゃあ寝かせて」

「九時から会議でございます」

「知ってるからつらいねん……」

昨夜から着たままの白いブラウスに、紺の乗馬ズボン。

黒髪は後ろで適当にまとめている。

目の下には、うっすら隈。

結局、ほとんど眠れなかった。

信用状。

船荷証券。

港湾使用。

飛行場。

C-46。

M20。

頭の中では、昨夜覚えた単語がぐるぐる回っている。

　向かいには、雪姫が座っていた。
　こちらも徹夜明けのはずだが、いつもの白いシャツ、赤いベスト、黒いパンツスーツ姿で、表情はほとんど変わっていない。
「雪姫さん」
「はい」
「ほんまに寝てへん？」
「寝ておりません」
「なんでそんな普通なん」
「普通ではございません」
「どこが？」
「少し眠いです」
「それだけ！？」
　雪姫の前には、まだ何も置かれていない。
　それでも背筋を伸ばし、静かに座っている。
　そこへ侍女が皿を運んできた。
「お待たせいたしました、お嬢様」
「おお……」
　美璃亜の前へ置かれた朝食。
　焼きたてのトースト。
　薄切りのハム。
　果物。
　そして、ふっくらとした黄色いオムレツ。
　その中央には。
　ケチャップの赤いハート。
「……」
　美璃亜は黙った。
　続けて侍女は、雪姫の前にも同じ皿を置いた。
　トースト。
　ハム。
　果物。
　オムレツ。
　そして。
　こちらにも赤いハート。
「……」
　雪姫も黙った。

　二人の視線が、同時にオムレツへ落ちる。
「侍女さん」
「はい♡」
「なんで雪姫さんのにもハート付いてんの？」
「同じ朝食でございますので♡」
「そこ揃える必要ある？」
「ございます♡」
　美璃亜は嫌な予感がした。
　侍女が胸の前で両手を合わせる。
「それでは――」
「待って」
「はい？」
「昨日のアレやる気？」
「もちろんでございます♡」
「文化の吸収早すぎん？」
　雪姫が美璃亜を見る。
「昨日のアレとは？」
「……」
　美璃亜は目を逸らした。
「知らん方がええと思う」
「では、知らないことにいたします」
「判断早っ」
　侍女は美璃亜のオムレツへ両手を向けた。
「美味しくなーれ♡」
「……」
　期待に満ちた視線。
「しゃーないな……」
　美璃亜も指でハートを作る。
「美味しくなーれ」
「萌え萌え――」
「きゅん♡」
「……」
　雪姫が止まっていた。
「美璃亜様」
「はい」

「今のは？」
「未来文化」
「忘れることにいたします」
「待って待って」
「何でしょう」
　美璃亜は雪姫の皿を見る。
　ケチャップのハート。
「雪姫さんの分、まだ美味しくなってへんで」
「元から美味しいと思われます」
「そういう問題ちゃう」
「どういう問題ですか」
「平等」
「何の平等でしょう」
　侍女がにっこりする。
「雪姫様も、ぜひ♡」
「結構です」
「ほら」
「結構です」
「せっかくハートあるのに」
「ケチャップです」
「冷たいなあ」
「オムレツは温かいです」
「そういうとこやぞ！」
　美璃亜は少し身を乗り出した。
「雪姫さん」
「はい」
「昨日一晩、私の勉強付き合ってくれたやん」
「はい」
「私、今日九時から幹部四人に詰められるやん」
「説明していただくだけです」
「おっさん来えへんやん」
「はい」
「つまり今、精神的支援が要る」
「……」
「一緒に萌え萌えきゅんして」

「論理が繋がっておりません」
「お願い♡」
「……」
　雪姫は、美璃亜を見る。
　侍女を見る。
　自分のオムレツを見る。
　赤いハート。
「……一度だけです」
「よっしゃ！」
「何を喜んでおられるのですか」
　三人が皿へ手を向ける。
「せーの」
「美味しくなーれ♡」
「美味しくなーれ♡」
　雪姫だけ少し遅れて、
「……美味しく、なれ」
「声小っさ！」
「続けてください」
「萌え萌え――」
　美璃亜と侍女がハートを作る。
「きゅん♡♡」
　一拍。
　雪姫も、ほんのわずかに指を曲げた。
「……きゅん」
「……」
　美璃亜は固まった。
　侍女も固まった。
　雪姫が静かに二人を見る。
「何でしょう」
「いや……」
　美璃亜は口元を押さえた。
「雪姫さん、今」
「何もしておりません」
「したやん」
「しておりません」

「きゅん言うた」
「言っておりません」
「言うたって」
「美璃亜様」
「はい」
「忘れてください」
「……」
　美璃亜はにやっとした。
「秘密にしといたる」
　雪姫の目が、わずかに細くなる。
「……ありがとうございます」
「その代わり――」
「条件を付けた時点で秘密ではありません」
「まだ何も言うてへんやん！」
「お顔に書いてあります」
「ちっ」
「今、舌打ちされましたね」
「してへん」
　侍女が楽しそうにオムレツを見た。
「では、冷めないうちにお召し上がりくださいませ♡」
　二人は、ほぼ同時にフォークを取った。
　美璃亜が一口。
「……うま」
　雪姫も一口。
「……」
　美璃亜が見る。
「美味しい？」
「はい」
「萌え萌えきゅん効いた？」
「料理人の腕です」
「認めへんなあ」
「認める理由がございません」
　二人はようやく朝食を食べ始めた。
　美璃亜はトーストへバターを塗りながら、ちらりと雪姫を見る。
（……これ使えるな）

　雪姫が顔を上げた。
「何でしょう」
「何でもない」
（絶対あとで使ったろ）
　そんなことを考えながら、紅茶へ手を伸ばす。
　背筋が自然に伸びた。
　肘は開かない。
　カップを持つ仕草まで、やたらと静かだった。
「……」
「どうされました？」
「いや」
　美璃亜は自分の手を見る。
「私、寝不足でも食べ方だけ綺麗やなと思って」
「以前と同じです」
「やっぱり？」
「はい」
「英語は消えたのに？」
「そのようですね」
「身体、変なとこだけ覚えてんな……」
「礼法は変わっておられません」
「……身体だけお嬢様やん」
「お嬢様ですので」
「中身ちゃうねん」
　雪姫は紅茶を一口飲んだ。
「ところで、美璃亜様」
「ん？」
「お食事の後、お召し替えをお願いいたします」
　美璃亜の手が止まった。
「……着替え？」
「はい」
「これでええやん」
　自分の乗馬ズボンを見る。
「楽やし」
「本日は正式な幹部会議です」
「秘密結社にもドレスコードあるん？」

「ございます」
「めんどくさっ」
「以前の美璃亜様は、ご自身で会議用のお召し物をお選びになっておりました」
「……」
嫌な予感がする。
「どんなん？」
「お食事の後に」
「今教えて」
「お食事の後に」
「怖いねんけど」
侍女がにっこり笑った。
「とてもよくお似合いになりますよ、お嬢様♡」
「その言い方が一番怖い！！」

※

「……何これ」
朝食から二十分後。
美璃亜は鏡の前に立っていた。
濃紺。
まず目に入るのは、その色だった。
細く絞られた腰。
膝下まで大きく広がるスカート。
New Lookを思わせる女らしい輪郭。
白に近い、小さなアイボリーの襟。
そこまではいい。
問題は、その上だった。
「軍人なん、私？」
「いいえ」
侍女が袖口を整える。
「ほな何でこんなことなってんの？」
同じ濃紺の短いジャケット。
高めの襟。
二列に並んだ金色のボタン。
襟と袖には、旧いヨーロッパ軍の礼装を思わせる金モール。
肩には飾り肩章。
胸元からは細い飾緒まで垂れている。

ただし、どこの国の軍服でもない。
階級章らしいものもない。
代わりに胸元には、小さなNOCの徽章。
「肩ジャラジャラしてんねんけど」
「飾緒でございます」
「何を飾ってんねん」
「飾緒を」
「説明になってへん！」
侍女は気にせず、白い薄手の手袋を差し出した。
「こちらを」
「まだあるん？」
「ございます」
白い手袋。
黒いパンプス。
黒髪は丁寧に梳かれ、肩から背中へまっすぐ落とされている。
鏡の中。
十九歳の美璃亜が立っていた。
「……」
妙に似合っている。
腹立つぐらいに。
「これ誰が選んだん？」
「お嬢様でございます」
「……」
「以前のお嬢様が」
「こっちの私ィ！！」
美璃亜は頭を抱えた。
「何考えてこんなん作ったん！？」
扉のところから声がする。
「お気に入りでしたよ」
振り返る。
雪姫が立っていた。
「雪姫さん」
「よくお似合いです」
「褒められてる気せえへん」
「褒めております」

　美璃亜は鏡を見る。
　黒髪。
　白い手袋。
　濃紺のドレス。
　金モールだらけの軍装風ジャケット。
「……」
　腕を組む。
「悪役令嬢っていうより」
「？」
「ラスボスやん」
「何の話ですか？」
「こっちの話」
　雪姫が時計を見る。
「八時四十分です」
「はい」
「参りましょう」
「会議室？」
「はい」
「この家の中？」
「はい」
　美璃亜は資料を抱えた。
「ほなすぐやな」
「そうですね」
「何階？」
「地下十二階です」
「……」
　美璃亜が止まった。
「今なんて？」
「地下十二階」
「地下？」
「はい」
「十二階？」
「はい」
「この家に？」
「はい」

「……秘密基地あるん？」
　雪姫は少し考えた。
「その呼び方でも構いません」
「あるんかい！！」

※

　案内されたのは、邸宅の奥だった。
　客を通すような場所ではない。
　細い廊下。
　重い扉。
　さらに奥。
「私、ここ初めて来た気する」
「以前は何度も」
「こっちの私はな！」
「便利な言い方ですね」
「便利やろ」
　突き当たり。
　何もない壁。
「……」
　美璃亜は左右を見る。
「行き止まりやで」
「はい」
「会議室どこ」
「下です」
「それは聞いた」
　雪姫が壁際の木製装飾へ手を伸ばした。
　小さな金属音。
　カチ。
　壁の一部が、ゆっくり奥へ沈んだ。
「……」
　続いて、横へ滑る。
　その向こうに現れたのは。
「うわ」
　鉄格子だった。
　いや。
　昇降機だ。

　黒い鉄骨。
　格子状の扉。
　真鍮の取っ手。
　まるで巨大な鳥籠を、そのまま縦穴へ吊したような古いエレベーター。
「何これ」
「昇降機です」
「見たら分かる！」
「では何を？」
「もっと普通のん無かったん！？」
「これで問題ありません」
「秘密結社って何でいちいち雰囲気作るん！？」
　雪姫が格子を開いた。
　ガシャン。
「どうぞ」
「怖っ」
「落ちません」
「その説明されたら余計怖い！」
　美璃亜は、おそるおそる乗り込んだ。
　床は黒い鉄板で覆われている。
　下は見えない。
　雪姫も続く。
　格子が閉まる。
　ガシャン。
　さらに外側の扉。
　ガコン。
「……」
　美璃亜は鉄格子を握った。
「これ地下十二階まで行くん？」
「はい」
「何秒？」
「しばらくです」
「一番嫌な答えや」
　格子扉の上には、時計盤のような丸い表示器が付いていた。
　時刻の数字の代わりに並んでいるのは、
《1》

《B1》

《B2》

　そして。

《B12》

　までの文字。

　細い赤色の針は、現在《1》を指している。

　雪姫がレバーを操作した。

　低い機械音。

　ゴウン。

　床が沈む。

「うわっ」

　美璃亜の身体が、わずかに揺れた。

　赤い針が動く。

　カチ。

《B1》

　鉄格子の向こうでは、暗い石造りの壁が上へ流れていく。

　カチ。

《B2》

　照明が一つ、上へ消えた。

　ガタン。

　ゴウン。

　カチ。

《B3》

「……」

　美璃亜は表示器を見上げた。

「一個ずつ見せられる方が怖いな」

「目を閉じられますか？」

「それはそれで怖い」

　カチ。

《B4》

　カチ。

《B5》

「地下五階」

「はい」

「この家の下、何入ってんねん」

「倉庫」
「うん」
　カチ。
《B6》
「通信設備」
「うん」
　カチ。
《B7》
「資料室」
「うん」
　カチ。
《B8》
「その他」
「その他が一番怖い！」
　雪姫は何も答えなかった。
　カチ。
《B9》
「……まだ三つある」
「はい」
　カチ。
《B10》
「この昇降機、帰りも乗るん？」
「当然です」
「階段ない？」
「ございます」
「そっちで帰ろ」
「地下十二階分ございます」
「エレベーターで帰ります」
「賢明です」
　カチ。
《B11》
　低い機械音が、少しずつ弱くなる。
　そして。
　カチ。
　赤い針が《B12》を指した。

　チン。
　小さな鐘が鳴る。
　ガタン。
　昇降機が止まった。
　雪姫が格子へ手をかける。
「到着しました」
「……地下十二階」
「はい」
　ガシャン。
　扉が開いた。
　美璃亜は一歩、外へ出る。
　暗い廊下。
　その先に、重い両開きの扉がある。
　雪姫が歩く。
　美璃亜も後を追う。
「雪姫さん」
「はい」
「今さらやけど」
「何でしょう」
「私、何説明したらええんやった？」
「六月二十五日に、朝鮮半島で大規模な戦闘が始まるという予測」
「うん」
「米軍が介入し、日本に駐留する部隊まで朝鮮へ投入される可能性」
「うん」
「その結果生じる輸送、修理、食料、医療、通信などの需要を、NOCが日本企業より先に押さえられるか」
「うん」
　雪姫が美璃亜を見る。
「そして、そのために何を準備するのか」
「……」
「昨夜、勉強しましたね？」
「した」
「では問題ありません」
「問題しかないねんけど」
　扉の前。

　雪姫が止まる。
「美璃亜様」
「何」
「一つだけ」
「うん」
「中では、今朝の件については」
「言わんよ」
「ありがとうございます」
「でも忘れてはない」
「忘れてください」
「無理」
　雪姫は無言で扉を開いた。
　重い音。
　ゴォン――。
「……」
　美璃亜の口が開いた。
　広い。
　天井が高い。
　中央には、巨大な円卓。
　ただし、完全な輪ではない。
　入口側だけ、人ひとりが通れる幅で途切れている。
　その切れ目の内側には、細い演台が一つ。
　円卓の中央は、大きく空いていた。
　その向こう。
　壁いっぱいに。
　NOCの紋章。
　赤く照らされた円環。
　中央の文字。
《NOC》
　薄暗い地下空間の中で、それだけが不気味に浮かび上がっていた。
「……」
（ショッカーやん）
　そして。
　円卓には三人。
　全員、女。

全員、黒いマント。

全員、深くフードを被っている。

顔の半分が影に沈んでいた。

「……」

一人。

二人。

三人。

そして。

美璃亜は隣に立つ雪姫を見る。

（待ってる三人に、雪姫さん足して四人か）

雪姫は壁際に掛けられていた黒いマントを取った。

「……」

羽織る。

肩を覆う。

そして。

フードを被った。

「雪姫さんまで、それ着るん！？」

「幹部会議の規定です」

「さっきまで普通に案内係の顔してたやん！」

「私は最初から幹部です」

「知ってる！　見た目の温度差の話や！」

黒いマント。

深いフード。

冷たい横顔。

美璃亜は、雪姫を見る。

（この人、さっきオムレツに『きゅん』言うてたよな）

危うく口から出そうになる。

飲み込んだ。

今ここで言えば。

おそらく。

英文資料を三百頁追加される。

それは死ぬ。

雪姫は四つ目の席へ歩いた。

黒いマント。

黒いフード。

待っていた幹部三人。

そこへ雪姫が加わる。

四人。

円卓。

地下十二階。

赤く光るNOCの紋章。

美璃亜は円卓の切れ目を通り、内側に置かれた演台の前へ立った。

金モールだらけの濃紺礼装。

白い手袋。

その周囲を、黒マントの女たちが囲んでいる。

「……」

美璃亜は周囲を見回した。

（女幹部四人）

（黒マント）

（地下秘密基地）

（私ひとり）

（円卓）

（これから四人がかりで詰められる）

「……」

口から出た。

「断罪イベント会場やん」

雪姫が言った。

「会議室です」

「同じや！！」

※

『第四話　断罪イベントは会議室で』

―2―

※

ボーン――。

「……」

突然。

低い鐘の音が、地下十二階の会議室に響いた。

美璃亜が正面を見る。

「何？」

ボーン――。

二度目。

音は、正面の壁際からだった。

NOCの巨大な紋章。

その脇。

黒い木枠に真鍮の文字盤を収めた、大きな振り子時計が掛かっている。

黒い長針が十二。

短針が九。

ボーン――。

「時計か」

「はい」

雪姫が答える。

鐘は続いた。

四度。

五度。

六度。

「……」

「どうされました？」

「いや」

七度。

八度。

「秘密基地にしては時計だけ普通やな思って」

「時刻を知らせるためのものですので」

「分かってるわ」

そして。

ボーン――。

九度目。

余韻が、円卓の上をゆっくり消えていった。

雪姫が時計を見る。

「九時です」

「ぴったりやな」

「当然です」

「悪の秘密結社も九時始業なん？」

「会議が九時開始です」

「そこだけ普通の会社やん」

返事はなかった。

黒いフードが四つ。

こちらを向いている。

「……」

美璃亜は口を閉じた。

雪姫が円卓の席から立ち上がる。

「それでは、始めます」

一拍。

「その前に」

「？」

雪姫は、向かいに座る三人を見た。

「現在の美璃亜様には、意識を失われる以前の記憶に一部混乱が見られます」

「ちょっと」

「皆様に関する記憶にも、同様の混乱が見られます」

「ちょっと待って」

「恐れ入りますが、改めてご紹介をお願いいたします」

「私の前で普通に説明すな！」

「必要ですので」

「もうちょいこう……包めへん？」

「何をでしょう」

「私の尊厳！」

「では」

雪姫は何事もなかったように右側を見る。

「麗華さんから」

「流した！」

黒いフードの一人が動いた。
細い指が、その縁へかかる。
ゆっくりと後ろへ払う。
左右にまとめた二つのシニヨン。
艶のある黒髪。
切れ長の目。
整った顔立ち。
笑っていないのに、妙に目を引く女だった。
「林麗華です」
「……」
「美璃亜様？」
「美人やな」
麗華が一度、瞬きをした。
「ありがとうございます」
「いや、ほんまに」
「以前にも何度もお会いしておりますが」
「それはこっちの私やろ！」
「こっち？」
「説明めんどいから流して」
「……」
麗華は雪姫を見る。
「いつもこの調子ですか？」
「昨日からです」
「二人で私を症例みたいに扱うな！」
向かい側。
別のフードから、小さな笑い声が漏れた。
「じゃあ次、私？」
「お願いします」
フードが勢いよく後ろへ落ちる。
褐色の肌。
垂れ気味の大きな瞳。
ブラウンの髪は太い編み込みにされ、カチューシャのように頭頂を縁取っている。
三人の中では、明らかに一番若い。
「Isabel de la Cruz」
一拍。

「ベルでいいですよ、美璃亜様」
「ベルちゃん」
「いきなりちゃん付け？」
「ええやん」
「まあ、いいですけど」
「軽っ」
「美璃亜様にだけは言われたくないですね」
「なんでやねん」
「……美璃亜様、そんな喋り方でしたっけ？」
ベルは楽しそうに笑った。
残る一人。
まだフードを被っている。
その女は。
すぐには動かなかった。
数秒。
美璃亜を観察する。
「……」
「何？」
ようやく。
白い指がフードへかかった。
ゆっくり外す。
金髪はピンカールを残し、後ろをすっきりまとめている。
濃いマスカラに縁取られた、鋭い目。
顎には、小さな黒子。
立ち上がれば、美璃亜よりずっと背が高そうだった。
表情は静か。
ただ。
美璃亜には。
（この人が一番怖そう）
そう見えた。
女は美璃亜を見る。
そして。
ごく自然に。
「Good morning, Miria. Do you remember me？」
「……」

　美璃亜が固まった。
「ぐっ……」
　全員が見る。
「Good……morning」
　女の眉が、わずかに上がる。
「That’s all？」
「……」
　美璃亜は雪姫を見る。
「雪姫さん」
「はい」
「助けて」
「ヴィヴィアン・ブラックウッドです」
「英語から逃げた！」
「航空、海運、軍需、調達、情報を担当しています」
「紹介だけして終わるな！」
　ヴィヴィアンが日本語へ切り替えた。
「本当に忘れたの？」
「……」
「以前は普通に英語で話していたでしょう」
「それ昨日知った」
「昨日？」
「こっちの話！」
　ベルが美璃亜を見る。
「英語、話せなくなったんですか？」
「話せへんことはない！」
　美璃亜は胸を張った。
「ちょっとなら」
「どのくらい？」
「ゲームで外人に怒られて、何となく意味分かるぐらい」
「……」
　ベルが雪姫を見る。
「重症ですね」
「何でやねん！！」
　麗華が顎へ指を添えた。
「影響は、言語能力だけ？」

　雪姫が答える。
「英語については、以前より著しく不自由になられています」
「雪姫さん！」
「事実ですので」
「私、昨日から事実に殴られすぎちゃう！？」
　ベルが首を傾げた。
「それで大阪弁に……」
「なんで大阪弁まで後遺症扱いやねん！！」
　雪姫。
「因果関係は、まだ確認されておりません」
「真面目に検討すな！！」
　ヴィヴィアンが少し眉を寄せる。
「Miria……」
「何」
「You poor thing.」
「可哀想ちゃうわ！！」
　ベルが吹き出した。
　麗華も、ほんの少しだけ口元を緩めた。
「笑うとこちゃうで！」
「失礼しました」
「今絶対笑ったやろ」
「いいえ」
「雪姫さんと同じタイプおるやん！」
「美璃亜様」
　雪姫の声だった。
「はい」
「そろそろ本題へ」
「はい……」
　雪姫がフードの縁へ手をかけた。
　静かに後ろへ払う。
　額を見せ、耳の周りを短く整えた艶のある黒髪。
　白いシャツに赤いベスト、黒いパンツスーツ。
　つい一時間ほど前まで一緒にオムレツを食べていた女が、今は黒いマントを肩へ掛けたまま、円卓の幹部席に座っている。
「……」

（やっぱ温度差すごいな、この人）

美璃亜は改めて四人を見る。

麗華。

ベル。

ヴィヴィアン。

雪姫。

顔が出ると。

余計に思う。

（美女しかおらんやん）

しかも。

全員、方向が違う。

鋭い美人。

明るい美人。

怖い美人。

無表情美人。

「……」

「美璃亜様？」

「いや」

美璃亜は腕を組んだ。

「おっさん、顔で幹部選んでへん？」

沈黙。

雪姫。

「能力です」

「ほんまに？」

「はい」

「全員美人やで？」

「それが何か？」

「いや……」

美璃亜は四人を見回す。

「悪の組織、顔面偏差値高すぎやろ」

「顔面偏差値？」

麗華が眉を寄せる。

「未来文化」

「便利ですね、その言葉」

「便利やで」

　ベルだけが笑った。
「褒め言葉として受け取っておきます」
「ベルちゃん話早いな」
「ありがとうございます」
　雪姫が書類を開く。
「では」
　声が変わった。
　朝食の時とは違う。
　幹部の声。
「首領は本会議には出席されません」
「ほんまに来えへんのやな」
「はい」
「逃げたな」
「後ほど、そのままお伝えします」
「やめて！」
　雪姫は続ける。
「美璃亜様より、六月二十五日に朝鮮半島で大規模な戦闘が始まる、との予測が提示されています」
　三人の表情から。
　笑みが消えた。
「首領は、その予測を事実とは認定しておりません」
「そこ強調する？」
「重要です」
「はい……」
「ただし」
　雪姫は資料を一枚、円卓へ置いた。
「仮に事実であれば、発生後に準備を始めては遅い」
　麗華が紙へ目を落とす。
「そのため六月二十五日までの一か月間に限り、既存事業を大きく損なわない範囲で、事前調査と準備を認める」
　ヴィヴィアン。
「首領が？」
「はい」
「珍しいわね」
「私もそう思います」
「雪姫さん！？」

「事実ですので」
「また事実！」
　雪姫が美璃亜を見る。
「それでは、美璃亜様」
「はい」
「ご説明を」
「……」
　来た。
　四人の視線。
　全員。
　美璃亜へ。
（これや）
（断罪イベントのやつ）
（悪役令嬢一人だけ前に立たされるやつ）
　美璃亜は抱えていた資料を、演台へ置いた。
　その上に。
　昨夜のノート。
《C-46　約200》
《すぐ飛ぶ　97》
《寝てるやつ起こす》
「……」
　麗華の視線が。
　そこへ止まった。
「美璃亜様」
「はい」
「始める前に、一点」
「何でしょう」
「この」
　麗華の指先が。
《寝てるやつ起こす》
　を指した。
「これは？」
「……」
　来た。
「飛行機」

「それは分かります」
「寝てるやつ」
「寝ている？」
「飛べへんやつ」
「飛行不能機？」
「そう！」
「では、そうお書きください」
「メモやぞ！」
「他人が読む資料です」
「昨日の私に言うて！」
「今の美璃亜様がお書きになったのでしょう？」
「そうやけど！！」
　ベルが口元を押さえている。
「ベルちゃん」
「はい？」
「笑ってる？」
「いいえ」
「絶対笑ってる」
「少しだけ」
「正直！」
　ヴィヴィアンはノートへ目を落としたまま言う。
「意味は分かる」
「ほら！」
「表現は悪い」
「お前もか！」
　麗華。
「《一か月以内に運航可能状態へ戻せる機体を選別》」
「長っ！」
「必要な情報です」
「一行のメモにそこまで書く！？」
「書いてください」
「はい……」
　美璃亜は肩を落とした。
「雪姫さん」
「何でしょう」

「助けて」
「私も昨夜、同様に思いました」
「裏切った！！」
「もう一つ」
　ヴィヴィアンの声だった。
「何？」
　指先が。
《すぐ飛ぶ　97》
　へ移る。
「この九十七機」
「うん」
「系列企業、関連会社、長期管理契約機を含む、およそ二百機のうち」
「うん」
「整備記録上、飛行可能とされている機体の数」
「せやろ？」
「今日から荷物を運べる機体が、九十七機あるという意味ではない」
「……え？」
　美璃亜の顔が止まった。
「また減るん？」
「減る可能性がある」
「なんで！？」
「操縦士」
　一つ。
「航空士」
　二つ。
「無線士」
　三つ。
「整備員」
　四つ。
「燃料」
　五つ。
「保険」
　六つ。
「運航許可」
　七つ。

「現在の契約」
　八つ。
「使用できる飛行場」
　九つ。
「……」
「機体だけ飛べても、荷物は運べない」
「昨日、雪姫さんにも似たようなこと言われた……」
「現実だから」
「現実、強すぎひん？」
「それから」
「まだあるん？」
「飛行可能という記録自体が、いつ確認されたものか」
「……」
「一機ずつ洗い直す必要がある」
　美璃亜はノートを見た。
《すぐ飛ぶ　97》
　鉛筆を取る。
《機体は飛べるかも》
　少し下へ。
《仕事できる数は不明》
「……」
　麗華が見る。
「先ほどよりは正確です」
「褒められてんの？」
「先ほどよりは」
「微妙！」
　雪姫は資料を整える。
「では今度こそ」
「はい」
「本題を」
「分かったって……」
　雪姫が円卓の下にあるレバーを引いた。
　ウィィィン――。
「ん？」
　ドーナツ状の円卓。

　その空いた中央から、円形の台がせり上がってきた。
　ガコン。
　台の上に広げられているのは、日本列島から中国大陸、朝鮮半島、ソ連極東までを収めた巨大な東アジア地図。
「……」
「どうされました？」
「秘密基地、こういうとこだけ期待裏切らんな」
「地図です」
　美璃亜は演台を離れ、朝鮮半島の地図へ近づいた。
　白い手袋の指を。
　三十八度線の辺りへ置く。
「六月二十五日」
　誰も喋らない。
「ここで」
　指を北から南へ滑らせた。
「大規模な戦闘が始まる」
　ヴィヴィアンの目が細くなる。
「北が動く？」
「うん」
「南へ？」
「そう」
「根拠は？」
「言われへん」
「情報源を明かせない？」
「おっさん――首領預かり」
　雪姫が頷いた。
「情報源については、首領より開示不要との指示があります」
　ヴィヴィアンは数秒黙った。
「分かった」
　そして。
「続けて」
「北が最初、かなり押す」
「ソウルは？」
　ベルが聞いた。
「落ちる」

　ベルの笑みが消えた。
「陥落は早い？」
「早い。……六月中やったはず」
「六月中？」
「戦争始まって、ほんますぐ」
　ヴィヴィアンが腕を組む。
「アメリカは」
「入る」
「航空と海軍？」
「それだけちゃう」
「地上軍も？」
「うん」
「どこから？」
　美璃亜は。
　日本列島を指した。
「まずは、ここ」
「……」
　ヴィヴィアンの目が。
　はっきり変わった。
「日本の占領軍を、朝鮮へ投入する？」
「せや」
「かなり大きな前提ね」
「分かってる」
「現在、米軍は朝鮮半島から主力地上部隊を引き揚げている」
「それ昨日聞いた」
「それをまた、日本から送り込むと？」
「送り込む」
「確信がある？」
「ある」
　ヴィヴィアンは何も言わなかった。
　代わりに。
　手元の黒い革鞄を開いた。
「？」
　一枚の写真。
　さらに。

　薄い報告書。
　円卓の上を滑らせる。
「何これ」
「見て」
　美璃亜は写真を取った。
　白黒。
　機首から吸気口が大きく開いた、小型のジェット戦闘機。
「……」
　見覚えがある。
「MiG-15？」
　ヴィヴィアンの眉が上がった。
「これは分かるのね」
「ゲームで見た」
「GAME？」
「未来文化」
「……便利ね」
「やろ？」
　ヴィヴィアンは写真を指した。
「四月二十八日」
「先月？」
「上海方面」
　報告書を一枚。
「ソ連人操縦士が飛ばすMiG-15が、国民政府軍のP-38を撃墜したとする報告があります」
「……」
　美璃亜が写真を見る。
「P-38って、あの双胴の？」
「そう」
「アメリカの飛行機やんな？」
「アメリカ製」
　ヴィヴィアンが訂正した。
「撃墜されたのは中華民国空軍機です。偵察型だったとの情報もある」
「あ、そっちか」
　美璃亜は、もう一度MiG-15を見る。
「……もう実戦出てんの？」
「出ている」

ヴィヴィアンが別の紙を置いた。
「五月十一日」
「二週間前やん」
「B-24も一機、失われたとの報告があります」
「MiGに？」
「その可能性が高いという情報はある」
一拍。
「ただし、地上砲火との共同戦果を含め、細部は確認中」
「……」
「美璃亜様」
「何」
「一か月後、朝鮮半島で大規模な戦闘が起こり」
「うん」
「そこへアメリカが介入すると言う」
「うん」
「なら」
ヴィヴィアンの指が。
MiG-15の写真へ落ちる。
「空も、今まで通りでは済まない」
「……」
美璃亜は写真を見た。
MiG-15。
ゲームなら。
ただの機体名だった。
性能表。
速度。
武装。
旋回。
上昇。
画面の中。
だが。
今。
目の前の写真に写っているそれは。
先月。
本当に人を撃ち落としたかもしれない。

「……」
「ヴィヴィアンさん」
「何？」
「これ」
　写真を持ち上げる。
「朝鮮にも来る？」
「分からない」
「……」
「現時点で、朝鮮半島への配備は確認していない」
「じゃあ」
「けれど、ソ連はすでに中国で実戦投入している」
「現時点では」
　一拍。
「美璃亜様と同じよ」
「え？」
「未来は知らない」
　ヴィヴィアンは写真を取り戻した。
「だから、現在を集める」
「……」
「未来の結果を知っているというなら」
　鋭い目が。
　美璃亜を見る。
「私は、今日までに起きたことを出す」
「……」
　美璃亜は少しだけ笑った。
「ええやん」
「何が？」
「役割分担」
　ヴィヴィアンの眉が、ほんの少しだけ動いた。
「まだ……情報を信じたわけではないけれど」
「知ってる」
「では」
　美璃亜は地図へ戻った。
　白い手袋の指を。
　日本列島の上へ置く。

「アメリカが入ったら」

一度。

息を吸う。

「日本に、金が落ちる」

※

『第四話　断罪イベントは会議室で』

―3―

※

美璃亜は。

白い手袋の指で、日本列島を叩いた。

「飛行機」

一つ。

「船」

二つ。

「弾薬」

三つ。

「食料」

四つ。

「医療」

五つ。

「血」

そこで。

麗華の眉が、わずかに動いた。

「血？」

「輸血用」

「それは分かります」

「戦争始まったら、何もかも足らんようになる」

美璃亜は指を広げた。

「昨日まで一ドルやったもんが」

「……」

「十ドル」

一拍。

「いや」

にやり。

「百ドルになるかもしれへん」

ベルが目を細める。

「随分、大きく出ますね」

「戦争やで？」

美璃亜は日本列島を、もう一度指で叩いた。

「アメリカが欲しい言うたら」
　飛行機。
　船。
　修理。
　食料。
　薬。
　血液。
　倉庫。
　トラック。
　通訳。
　電話。
　港。
　飛行場。
「全部、金になる」
　そして。
「その一セントも」
　白い手袋の指を。
　日本列島の上で止めた。
「日本に落とさん」
「……」
　四人が黙った。
　美璃亜は胸を張る。
「日本おしまい倶楽部やろ？」
　一拍。
「ほな、日本が戦争で生き返る金から潰す」
　静寂。
「……」
　ベルが。
　先に笑った。
「好きです」
「やろ？」
「作戦名みたいで」
「分かってるな、ベルちゃん」
　麗華は笑わなかった。
「無理です」

「早っ！」
「一セントも、という部分が」
「キャッチコピーやって！」
「では、実務上は無視してよろしいですね」
「そこはちょっと尊重して！」
「不可能な目標を尊重しても意味がありません」
「麗華さん厳しい！」
　ヴィヴィアンが腕を組んだ。
「それ以前に」
「何？」
「戦争が始まったからといって、何でも百倍になるわけではない」
「分かってるわ！」
「ならいいけれど」
「勢いや勢い！」
　雪姫がペンを走らせる。
「《日本側に帰属する利益を、可能な限り抑制する》」
「もう全然悪の組織感ない！」
「会計上はこちらで」
「会計に悪の美学を求めた私が悪かった！」
　ベルが肩を震わせている。
「笑うな！」
「すみません」
「絶対すみません思ってへんやろ」
「はい」
「正直すぎる！」

※

「では」
　麗華が資料を一枚、円卓へ置いた。
「生産について整理します」
「はい」
「まず」
　細い指が、世界地図の南側へ動く。
「現在の事業は止めません」
「うん」
「インド」

　一つ。
「フィリピン」
　二つ。
「インドシナ」
　三つ。
「マラヤ方面」
　四つ。
「既存契約があります」
「昨日聞いた」
「工場も」
「うん」
「人員も」
「うん」
「すでに動いています」
　麗華は美璃亜を見る。
「朝鮮半島で何か起こるかもしれない、という理由だけで止めることはできません」
「分かってる」
「本当に？」
「昨日よりは」
「昨日よりは」
「そこ繰り返さんでええねん！」
　麗華は気にせず続けた。
「ただし」
「うん」
「新規拡張は再検討できます」
　美璃亜の目が上がる。
「それ」
「追加設備」
「うん」
「追加人員」
「うん」
「新規契約」
「うん」
「六月二十五日までは、必要に応じて保留」
「それでええ」

「まず既存設備と人員を棚卸しします」
「棚卸し」
「どこに、何が、どれだけあるか」
「うん」
「何へ転用できるか」
「うん」
「追加資金を使わず、どこまで準備できるか」
「それ調べて」
「工場には余力を残します」
「うん」
「既存の生産設備についても、短期間で何へ切り替えられるか確認します」
「食料とか？」
「食料」
「衛生用品」
「はい」
「機械部品」
「はい」
「修理」
「はい」
「M20」
　一瞬。
　麗華の視線がヴィヴィアンへ向いた。
　ヴィヴィアンが答える。
「少量生産設備は維持する」
「増産は？」
　美璃亜が聞く。
「まだ」
「でも要るで」
「あなたの情報が正しければ」
「正しい」
「なら六月二十五日に判断する」
「一か月後から作って間に合うん？」
　麗華が答えた。
「だから」
　指先が資料へ落ちる。

「生産設備を止めない」
「……」
「必要な資材」
「うん」
「人員」
「うん」
「工程」
「うん」
「今から全部を大量生産するのではなく」
　一拍。
「必要になった時に、すぐ増やせる状態を作っておく」
　美璃亜は少し考えた。
「……なるほど」
「外れた場合も」
「？」
「他の市場へ回せるものは回します」
「インドシナ？」
「例えば」
「売れる？」
「売れるものだけ作ります」
「強いな」
「商売ですので」
　美璃亜は頷いた。
「ほな飛行機」
　麗華。
「ヴィヴィアン」
「え？」
　ヴィヴィアンがこちらを見る。
「航空機は私」
「あ、そっちか」
「麗華は工場」
「分業細か！」
「だから幹部が四人いるのです」
　雪姫が言った。
「私入れたら五人やろ」

「美璃亜様は幹部ではありません」
「何なん私！？」
　雪姫が少し考えた。
「首領のご令嬢」
「肩書き弱っ！」

※

　ヴィヴィアンがC-46の資料を引き寄せた。
「航空機について」
「はい」
「買えるだけ買う、は却下」
「まだ言うてへん！」
「顔に書いてあった」
「雪姫さんみたいなこと言い出した！」
「世界中で急に輸送機を買い始めれば」
　ヴィヴィアンは指を一本立てる。
「値段が上がる」
　二本。
「目立つ」
　三本。
「理由を探られる」
「……」
「だから」
　資料をめくる。
「購入候補」
　一つ。
「長期貸借候補」
　二つ。
「系列会社へ移管できる機体」
　三つ。
「管理契約を結べる機体」
　四つ。
「すでにNOCが関与している機体を優先して洗い出す」
「静かに増やせるやつを探す？」
「そう」
「悪の組織っぽい」

「褒めていないわ」
「私は褒めてる」
　ヴィヴィアンは無視した。
「ただし、今すぐ購入契約は結ばない」
「買わへんの？」
「棚卸しと採算を確認してから」
「一か月しかないで」
「だから候補を先に絞る」
「……」
「必要になった瞬間に契約できる状態まで準備する」
「仮押さえ？」
「相手には条件を出させる。ただし、NOCから資金はまだ出さない」
「悪いな」
「商売よ」
　美璃亜は少し笑った。
「ベルちゃんと同じこと言いそう」
「それは褒め言葉？」
「たぶん」
　ヴィヴィアンは資料へ戻った。
「整備中や保管中の機体も、一機ずつ状態を確認する」
「起こす？」
「まず、起こせるか調べる」
「そこから？」
「追加費用を使わずに維持できるものは維持する」
「うん」
「部品、人員、追加整備が必要な機体は、必要額を出す」
「うん」
「復帰させるかどうかは、その後」
「全部起こしたらあかん？」
「外れた時、誰が費用を払うの？」
「……おっさん」
「首領の予算にも限度がある」
「悪の組織、夢ないな！」
「航空機は、夢では飛ばない」
「燃料で飛ぶ？」

「燃料と金よ」
「もっと夢ない！」
「それから」
「何？」
「飛行可能になっても、必要がなければ飛ばさない」
「寝かせとくん？」
　麗華が見る。
「言い方」
「もうええやろ！」
　ヴィヴィアンは少し笑った。
「今回は意味は合ってる」
「ほら！」
「でも保管機」
「はい……」
　美璃亜はノートへ書く。
《保管機》
　その横へ、小さく。
《寝かす》
　麗華が見た。
「見えていますよ」
「うるさい！」
　ヴィヴィアンは世界地図へ手を伸ばした。
「それと」
「何？」
「新しい輸送経路の候補」
　美璃亜が顔を上げる。
「必要？」
「必要になる可能性が高い」
「朝鮮まで？」
「朝鮮だけではない」
　日本。
　フィリピン。
　グアム。
　沖縄。
　東南アジア。

　太平洋。
「米軍がどこから何を動かすかで変わる」
「……」
「航空路」
「うん」
「海路」
「うん」
「中継地」
「うん」
「燃料」
「うん」
「整備」
「うん」
「倉庫」
「うん」
「人員」
「うん」
「全部、一か月で確認する」
「契約も？」
「候補と条件まで」
「実際に使うんは？」
「必要になってから」
「多ない？」
「あなたが始めた話でしょう」
「はい」

※

「じゃあ次、私ですね」
　ベルが片手を上げた。
「ベルちゃん」
「はい」
「何するん？」
「表」
「表？」
「NOCの表の顔です」
　ベルは笑った。

「食品」

　一つ。

「輸送」

　二つ。

「倉庫」

　三つ。

「衛生用品」

　四つ。

「海外商社」

　五つ。

「表向きは普通の会社として動いている事業は、そのまま使います」

「使う？」

「はい。食品会社なら食品会社として。運送会社なら運送会社として。戦争のために作った会社には見せません」

「バレへん？」

「何が？」

「戦争待ってること」

「戦争以外でも売れるものなら」

　一拍。

「誰も困りません」

「……」

　美璃亜は少し感心した。

「ベルちゃん賢いな」

「知ってます」

「自分で言うんや」

「それと」

「何？」

　ベルの指が。

　地図から外れた。

「資産家」

「金持ち？」

「はい」

「何するん？」

「候補を集めます」

「何の？」

「航空機」

　一つ。

「船」

　二つ。

「倉庫」

　三つ。

「工場」

　四つ。

「全部NOCだけで持つ必要はない」

「……」

「貸したい人」

「売りたい人」

「出資したい人」

「儲けたい人」

「……」

「そういう人間へ、先に接触します」

　美璃亜は目を細くした。

「博打に誘うん？」

「まだ誘いません」

「誘わへんの？」

「相手が何を持っているか」

「うん」

「いくら欲しいのか」

「うん」

「どこまで急げるのか」

「うん」

「それだけ先に聞き出します」

「契約は？」

「まだ」

「外れたら？」

「何も買っていません」

「強っ」

「当たったら？」

「相手が考えている間に、こちらは条件を知っています」

「悪い顔してるで」

「褒め言葉ですね」
「褒めてる」
　ベルは楽しそうに続ける。
「それから、アジア圏の情報」
　笑顔が少し消える。
「政治」
「うん」
「港」
「うん」
「商社」
「うん」
「労働者」
「うん」
「現地の空気」
「……」
「軍が動くだけでは、物は動きません」
「ヴィヴィアンさんと同じこと言うなあ」
「軍人だけ見ていたら、商売を外します」
　ベルが地図を指した。
「誰が困っているか」
「うん」
「誰が買いたがっているか」
「うん」
「誰が金を持っているか」
「うん」
「誰が港を動かしているか」
「……」
「そこは私が拾います」
「頼もしいな」
「でしょう？」

※

「私からも」
　ヴィヴィアンが再び口を開いた。
「ソ連」
　一言。

　美璃亜の顔が変わる。
「MiG-15？」
「それだけではない」
「うん」
「中国」
「うん」
「極東の航空部隊」
「うん」
「米軍」
「うん」
「日本駐留地上軍」
「うん」
「極東空軍」
「うん」
「海軍」
「うん」
「それと」
　一拍。
「本国から動く可能性のある部隊」
「海兵隊？」
「含む」
「……」
「あなたの予測が正しければ」
　ヴィヴィアンは、日本から朝鮮半島へ指を動かした。
「米軍は短期間に、かなりのものを必要とする」
「そう」
「だから」
「？」
「何が不足するかを先に読む」
「弾薬？」
「それも」
「輸送機」
「それも」
「トラック」
「それも」

「医療」
「それも」
「全部やん」
「戦争だから」
　美璃亜が黙った。
　ヴィヴィアンは続ける。
「ただし」
「何？」
「NOCが全部作る必要はない」
「え？」
「作れる国で作る」
「……」
「持っている会社から買う」
「うん」
「余っている場所から動かす」
「うん」
「それを」
　指が日本を避ける。
「できるだけ日本以外で完結させる」
　美璃亜の目が輝いた。
「それや！」
「でも」
　雪姫の声。
「完全には不可能です」
「……」
　美璃亜の目が死んだ。
「まだ何かあるん？」
「ございます」
「嫌や」
「国内についてです」

※

　雪姫が一冊の帳簿を開いた。
「美璃亜様」
「はい」
「先ほど」

「うん」
「一セントも日本へ落とさない、と」
「言うた」
「では」
　雪姫は淡々と続ける。
「日本国内の港湾荷役業者を使わない」
「……」
「国内倉庫も使わない」
「……」
「国内の運送会社も」
「……」
「修理工場も」
「……」
「銀行も」
「……」
「保険関係も」
「……」
「使わない？」
　美璃亜は黙った。
「……」
　四人が見る。
「……無理？」
「無理です」
「即答！」
「日本を拠点にしながら、日本国内の事業者へ一切の支払いを行わないことは現実的ではありません」
「でも日本に金落としたら意味ないやん！」
「規模の問題です」
「規模？」
「日本企業を」
　雪姫が指を一本立てる。
「主契約者にしない」
「……」
「大きな利益を蓄積させない」
　二本。

「必要な国内事業者は、限定的な下請契約に留める」
　三本。
「契約の主体」
　四本。
「利益」
　五本。
「海外資産」
　最後に。
「それらをNOC側へ残す」
「……」
　美璃亜は少し考えた。
「日本企業に一円も払わんのちゃう」
「はい」
「日本企業を、戦争特需の主役にさせへん」
「その方が現実的です」
「……」
　悔しい。
「顔に出ています」
「悔しいねん！」
「現実ですので」
「また現実！！」
　麗華が言った。
「国内工場も必要です」
「うっ」
　ヴィヴィアン。
「港も」
「うっ」
　ベル。
「人も」
「うっ」
　雪姫。
「銀行も」
「それや！」
　美璃亜が突然、顔を上げた。
「銀行」

　四人が見る。
「キラ様」
　沈黙。
　ベルが瞬きをした。
「誰です？」
「許婚」
「……」
　一拍。
「会議中に惚気ですか？」
「ちゃうわ！！」
「では？」
「鷹津司銀行！」
　雪姫の目が少し変わる。
「なるほど」
「使える？」
「すでにNOCとの取引実績があります」
「ほら！」
「ただし」
「何」
「鷹津司銀行も日本企業です」
「……」
　美璃亜が止まった。
「……」
　ベルが口元を押さえた。
「笑うな！」
「まだ笑ってません」
「今から笑う顔や！」
　雪姫が続ける。
「使うのであれば」
「うん」
「日本側に残る利益を必要最小限に抑える契約設計が必要です」
「それ雪姫さんやろ」
「はい」
「じゃあ頼む」
「承知しました」

「……」

あまりにも早い。

美璃亜は少し拍子抜けした。

「え、ほんまに？」

「私の担当ですので」

「かっこええな」

「ありがとうございます」

「萌え萌えきゅ――」

雪姫の目が。

美璃亜を見た。

「……」

美璃亜は口を閉じた。

「何でしょう」

「何でもないです」

ベルが首を傾げる。

「今、何か？」

「何もない！」

雪姫だけが。

ほんの少し。

目を細めていた。

（危なっ）

（秘密やった）

※

雪姫は、何事もなかったように書類を整理した。

「では」

紙を一枚。

中央へ。

「担当をまとめます」

麗華を見る。

「林麗華」

「はい」

「既存生産の維持。新規拡張の再審査。工場、整備、補修、生産余力の棚卸し」

「承知しました」

ベル。

「Isabel de la Cruz」

「はい」
「表事業。海外資産家。人員。商社。医療関係。アジア圏の現地情報」
「承知しました」
「新規出資と売買契約は、条件確認まで。締結は保留します」
「お願いします」
　ヴィヴィアン。
「Vivian Blackwood」
「ええ」
「航空、海運、軍需需要。ソ連、中国、米軍の動向。輸送資産と経路の査定」
「分かった」
「新規取得と長期契約は、棚卸し後に再承認」
「異議なし」
　そして。
　雪姫自身。
「私は」
　ペンを置いた。
「予算」
　一つ。
「契約」
　二つ。
「法務」
　三つ。
「銀行」
　四つ。
「保険」
　五つ。
「航空、海運、倉庫を含む各契約の取りまとめ」
「全部？」
　美璃亜が聞いた。
「全部です」
「雪姫さん死なん？」
「美璃亜様にご心配いただくほどではございません」
「昨日一晩で私死にかけたで」
「美璃亜様とは違いますので」
「刺すな！！」

麗華が口元を押さえた。

ベルは普通に笑っている。

ヴィヴィアンまで、少しだけ笑った。

「笑うな！」

「失礼」

雪姫だけは無表情だった。

「では」

美璃亜が聞く。

「私は？」

四人が。

一斉に。

美璃亜を見る。

「……」

「何？」

雪姫が答えた。

「六月二十五日以降について、美璃亜様が覚えておられることを、可能な限り整理してください」

「覚えてること？」

「戦況」

一つ。

「米軍の動き」

二つ。

「日本から動いた部隊」

三つ。

「不足した物資」

四つ。

「戦局が変化した時期」

五つ。

「日付順に」

「……」

「確実に覚えておられることと、曖昧なことは分けてください」

「全部うろ覚えやったら？」

「そのようにお書きください」

「未来人の信用なくならへん？」

「誤った情報を、確実な情報として扱う方が危険です」

「……」

美璃亜は少し黙った。

「分かった」

「そして」

「まだあるん？」

「勉強を」

「まだあんの！？」

「ございます」

「何を！？」

「まず」

雪姫が。

新しい書類の束を取り出した。

「国内企業との契約について」

「……」

厚い。

「何ページ？」

「まだ数えておりません」

「雪姫さん」

「はい」

「今朝のこと、思い出してええ？」

「秘密にしてくださるのでしたね」

「……はい」

「では」

書類が。

美璃亜の前へ置かれた。

ドサッ。

一番上の表紙には。

《鷹津司銀行》

《既存融資・海外決済契約》

「……」

「こちらからお願いいたします」

「キラ様んとこやん」

「遊びではございません」

「まだ何も言うてへん！」

「お顔に書いてあります」

「……」

美璃亜は。

厚い書類の山を見た。

その向こう。

朝鮮半島。

日本。

アメリカ。

飛行機。

船。

工場。

銀行。

人。

契約。

戦争まで。

あと二十九日。

「……」

（断罪イベントって）

（もっと、こう）

（華麗に論破して――）

（ざまぁするもんちゃうん……？）

現実は。

契約書の束だった。

※